

ドナウ通信

目次

| | |
|-------------------------------|----|
| 大使館・領事部からのお知らせ | 2 |
| 文化行事のお知らせ | 2 |
| 補習校便り | 4 |
| <作文> 「24の瞳」を読んで | |
| ホロシ・クリスティーナ・はな恵 | 5 |
| ブダペストから贈る新刊書 | |
| 瀬川知恵子『ふだん着のロンドン』 | 7 |
| 羽場久尾子『統合ヨーロッパの民族問題』 | 10 |
| 盛田 常夫『体制転換の経済学』 | 12 |
| <特集> 秋の夜長のこの1冊 | |
| 遠藤周作『深い河』 吉田之憲 | 15 |
| ハプスブルグ家について 岡田 茂 | 16 |
| 最近読みなおした本 下川義隆 | 18 |
| 日本から届いた本 丸山和正 | 20 |
| 人物往来 | 21 |
| 掲示板 | 22 |

大使館・領事部からのお知らせ

ハンガリーは従来治安の良い国とされてきましたが、最近の社会情勢の変化を反映し、また、在留邦人の増加に伴い邦人が犯罪に遭遇する例が増大しております。当館が承知している邦人被害件数も、本年1月から9月末まで既に36件にもものぼっており、今後、日・「ハ」間の人・物の流通が活発化するに伴って、邦人が事件や事故に巻き込まれるケースの増加が憂慮されま

す。
そこで当館では、在留邦人の皆様が当国で安全に生活できるよう参考迄に「ハンガリー在留邦人の安全マニュアル」を作成しました。本マニュアルは領事部窓口にて、供覧しておりますので、どうぞ皆様の防犯にお役立て下さい。

夏も終わり、食欲と文化の季節がやってきました。日本大使館及び国際交流基金では、次の通り文化行事等を計画していますのでハンガリーのお知らせ合いの方などにご紹介いただき、どうぞ御一緒に御参加下さい。なお、参加申し込みが必要なものもありますのでそれぞれ主催団体又は大使館に事前にご確認下さい。

1) 生け花教室

主催：日本大使館

於：Virinyosi Községi Ház

(Budapest, XII.)

Szarvas Gábor út 8/c)

当地在住の草月流師範香山純子さんの指導により、生け花の初歩から学ぶ教室を10月6日より毎週木曜日午後2時より6時まで開催しています。継続して学習され、上達した方は申請により免状の習得も可能です。

途中からの参加も歓迎しますので、

お知らせのハンガリーの方をお誘い合わせの上、お気軽に参加下さい。

2) 紙切りデモンストレーション

国際交流基金日本文化紹介派遣事業

講師：林家小正楽

11月7日(月)、8日(火) 19:00

於：Merlin Színház

(Budapest, Gerláczy u. 4.)

また、9日(水) 18:00より、基金事務所のビル地下会議室にて「紙切り教室」が開催されます。

(事前に基金事務所に参加申込み要)

3) 留学生コンサート

主催：日本人会

11月12日(土) 16時～18時

於：バルトーク記念館

(ブダペスト市内)

邦人留学生とハンガリー人若手音楽家の交流コンサート

4) 文化映画

主催：国際交流基金ブダペスト事務所
11月17日(木)、18日(金) 18:00
於：Toldi Mozi Balazs Béla

Stúdiója, Kisterem

(Budapest, Bajcsy-Zsilinszky út
36-38.)

「にんぎょう」、及び「歌舞伎の後見」がハンガリー語ナレーション版(初制作)にて上映されます。

5) 淡路人形浄瑠璃公演

国際交流基金日本文化紹介派遣事業
11月24日(木)、25日(金) 19:00
於：Budapest Babszínház

(Budapest, Andrássy út. 69)

6) 日本・ハンガリー友好親善

合唱コンサート

主催：ハンガリー合唱連盟

日本・ハンガリー友好協会

ハンガリー・日本友好協会

後援：日本大使館

11月26日(土) 17:30

於：民族館博物館ホール

ブダペスト及びニレジハーザの合唱団が、ハンガリー及び日本の歌をそれぞれ30〜40分歌います。
(主催団体より招待状を発送)

7) 日本語能力試験

主催：国際交流基金
12月4日(日)
於：外国貿易大学

(Budapest, Eöseri út. 3.)

ハンガリーでは、昨年に続き2回目の実施。

8) 月例映画上映会「二周年記念」

主催：国際交流基金ブダペスト事務所
於：Toldi Mozi Balazs Béla

Stúdiója, Kisterem

(Budapest, Bajcsy-Zsilinszky út
36-38.)

12月5日(月) 北京的西瓜

6日(火) 駅

7日(水) 人間の約束

8日(木) 東京上空

いらっしやいませ

9日(金) 柳生一族の陰謀

(それぞれ18時から上映)



補習校便り

記録的な暑さが続いた夏休みも終わり、補習校の子どもたちにも通常の学校生活がもどってきました。8月末までに8名の児童生徒が転出し、9月には6名の新しい仲間を迎え、在籍数は40名になりました。学習に適した季節を迎え、子どもたちには大いにがんばってほしいところですが、在籍学校では新学期。それぞれ、新しい環境に慣れるのもひと苦労のようです。また、「楽しかった夏休み」でちょっと疲れ気味といったところですが、早く生活のリズムをとりもどしてもらおうとともに充実した学校生活が送れるように教員一同も気を引き締めています。

2学期最初の学校外活動日として9月10日にマルギット島への遠足を実施しました。マルギット島はごく手近な憩いの場であり、子どもたちにとっては家族で出かけたり、在籍学校で行ったりしており、今回が初めてという子

はあまり多くはありません。そこで、何か趣向を凝らしてということで、グループごとに「写ルンデス」を持たせて、子どもの自由な感性で、風景を切り取らせてみました。シャッターを押すだけで写真はとれますが、被写体の選び方、構図のとり方、効果など、子どもは子どもなりに一生懸命考えて、夢中になって被写体探しをしていました。大人のような邪念や知識を持たないために失敗も多い反面、素直なものも多く、また、それぞれの子どもの個性が作品に現れています。加えて、意図しない偶発的な効果などがあつたり「子供の目の高さから見たマルギット島」は、たいへん面白い作品に仕上がっています。補習校図書室で展示しています。

11月19日には、恒例の学習発表会を予定しています。大まかなプログラムができ、子どもたちは紙芝居、劇、作文、音楽、研究発表など、それぞれの活動に取り組んでいます。何をしようか構想を練ったり、劇の配役を決める

など産みの苦しみを十分に味わっただけに練習にも気合いが入っています。残り1か月、限られた練習回数の中でふだんの学習の成果を十分に活用し、有意義な発表会ができればと考えています。

補習校の図書室は、保護者の皆さんにはもちろん、お子さんが補習校に通われていない方にも広くご利用いただいています。毎年、海外子女教育振興財団をはじめ、各種団体から児童生徒用の本を中心に文庫本、統計資料等の寄贈いただいていますし、帰国される保護者の方々よりの寄贈で、一般の方々にも楽しんでいただける本がそろっています。本の貸出は原則として1回につき3冊まで、期限は1週間です。児童生徒用には貸出カードがありますが、それ以外の方々は備え付けのノートに必要事項をご記入戴き、ご利用ください。置く場所に限界があるため、大人の本は職員室の方にも保管しています。まだご利用になったことのない方は、お気軽にご利用ください。

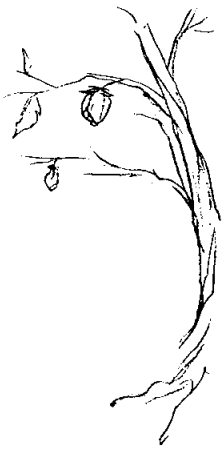
「二十四の瞳」を読んで

六年 ホロシ・クリステイナはな恵

一体、何のために戦争はあるのだろうか。戦争は自分達の国をめちやくちやにしている。それだけやっているのに原因はほんのわずかな事だから私は、とても不思議に思いました。八津が死んだ時、大石先生が、

「戦争はすんだけど、八津はやっばり戦争で殺されたのだ。」

と、言いました。最初、あまり意味が良く分からなかったけれど、次の文でなっとくできました。青いかきの実を食べて死んだ八津は、かきの実がうれるまで待ちきれなかったのです。しかし、かきの実がうれるまでに木に残った事はありませんでした。みんな、戦



争のせいで、おなががすいていたのです。

子供らは、いつも野に出て茅花を食べ、いたどりを食べ、すいばをかじった。土のついたさつまいもを生で食べた。そんななかで病気になるても村に医者はいなかった。よくきく薬もなかった。

という所を読んだ時、最初に思った事は、昔の子供ってとってみたいへんだったんだなあ、薬もないなんてかわいそうだなあという事でした。でも、もう一度よく考えてみるとそう思ったのはまちがいでした。昔だけでなく、今もそういう事が起こっているのです。昔にくらべて今は、ずっと進歩しているはずなのに、そういうことは昔と同じだと思えます。同じ世界にいて、その世界の一部で、他の者の土地を取り合う、そして、みんなの生活をくずしてしまうような争いは、本当は絶対にしてはいけないのに、この事は大石先生の時代のもっと、ずーっと前から続いています。そのために、昔の人々も

今の人々も、どんなに苦勞しなければならなかったでしょう。この事は、この本でとてもよく分かりました。ここに書いてあったのは、どんぐりの粉をパンにしていたり、玄米をビールびんの中でつき、少しでも白い米にして食べたり、なんと教科書までが、そのまま用紙で折ったものだけ、というのです。私達には、こんな事は信じられない事です。私達は、ちゃんとした、小麦粉から作ったパンを食べているし、玄米ではなく、ちゃんとした白いお米もあるし、教科書はカラーで、とても読みやすくなっています。しかし、大石先生の時代に、本当にそんな事があり、その原因が戦争なら、私達の生活も戦争が起こるといっぺんに大石先生の時みたいになってしまふんだなあと思いました。

大石先生が初めて一年生を教えるから二十年近くたった時、その一年生だったみんなが集まったのですが、その時私が思った事は、二十年前は、十二人以上いたのに、集まった時は六、七

人でした。二十年もたてば、こんなにちがうのかと思いました。しかも、戦争の苦しい時代だったから、兵隊に行つて戦死した人もいたし、食べ物がなく、病気になつて亡くなつた人もいました。戦争から無事帰つてきても、目が見えなかったり、片足、両足がなくなつたり、そのようなけがをしていなくとも、両親とはなれたりして、その人だけじゃなく、悲しみは、どんどん広がつていくのです。

そして又、戦争は、美しかった森や町を、どんどんこわして、最後にはだだっ広い野原にしてしまいます。しかも、その森の緑は、お金ですぐには取り戻せないのです。世界中の人々がどんなにお金を寄付したとしても、お金だけではもとに戻せないのです。木一本で何十年もかけて育っていきます。だから、またもとのように戻すにはとてもたくさんのお金が要なのです。

このような事を、戦争で爆弾を投げる人が考えてくれたらいいのになあと思

いました。

現在でも、戦争が終われば、またどこかの国が戦争を開始し、それが次々とくり返されています。私は、戦争をなくすためには、「話し合い」が必要だと思えます。どうしてそう思うかというのと、私達でも、何も話し合わないで、だれか一人が決めると、不公平という事でけんかになります。前もつてみんな話し合うと、だれもがきちんと本当の答えを見つけるので、けんかにならなくてすむのです。戦争はけんかを大きくし、苦しみを加えたものだから、そうならないようには、みんなが一つの心になり、「話し合い」をすればいいと思えました。

戦争をして、損をし、いい事は絶対何もないと思えます。今では、その事を知っている人もそんなに少なくないと思えます。世界は今、どんどん進歩していつているのだから、この物語のようにならず、だれもが心配せずに夜眠れるように早くなつたらいいです。



ブダペストから贈る新刊書

ブダペスト在住の著者による新刊の著書をご紹介します。

瀬川知恵子

『ふだん着のロンドン』

近代文芸社

1994年7月、1500円

羽場久尾子

『統合ヨーロッパの民族問題』

講談社現代新書

1994年9月、650円

盛田常夫

『体制転換の経済学』

新経済学ライブラリー第20巻

新世社編集、サイエンス社発売

1994年12月予価3000円



紹介 『ふだん着のロンドン』

著書の言葉…「はじめに」より

夫の海外転勤に伴って、三人の子供達が幼いころから、私達はよく旅行に出かけたものでした。アメリカ、アジア、イギリス、ヨーロッパの各地へ。メキシコやバルバドスへ。

いつも大人並みのハードなスケジュールだったとの反省もありますが、それでも子供達は遅しく育ち、行く先々で忘れられない思い出をポケット一杯に膨らませていったようです。

私にも宝物があるとすれば、世界各地の溢れる思い出の引き出しを持っていること、と言えるでしょう。その中から、ロンドン在住の体験を中心にいくつかを取り出してみました。

主婦の目から見た外国のレポートを書いてごらん下さい。という大学の恩師のアドバイスが直接のきっかけとなり貴重な思い出を子供達の為にも記録

して残してやりたい気持ちが多くなりました。

また、ロンドンに滞在し初めの当初旅行案内やショッピングガイドはあっても、実際の生活に必要な書籍がなかなか見当たらず。とまどいがちだった日々を思い出します。これからビジネスや勉強でロンドンにお住まいになる方に、私の体験の中から、なにか、お役に立てるヒントを提供できれば幸せに思います。

ハ「ロンドン歳時記」…

ロンドン・マラソン 1989V

より抜粋

四月二十三日の日曜日は、毎年恒例行事、ロンドン・マラソンが開催された日でした。

出場者三万人という大規模なもので前年のオリンピックのマラソン上位入賞選手を含むトップ・ランナーが世界中から招待されました。賞金付の大イ

ベントです。コースとなるチームズ川
両岸付近は、日中、車の乗り入れ禁止
となり、たくさんの警官が整理にあた
っていました。

スタート地点になるグリニッジ天文
台の公園では、大変な数の簡易トイレ
の設置、たてつけの棚、多数のテント
のすえつけなど、相当に時間がかけら
れ準備がされたようです。終点にあた
るウエストミンスター橋周辺からウォ
ータールー橋にかけては、選手の荷物
を運ぶ数十台のバスが待機し、各選手
の家族の待ち合わせに便宜を計って、
チームズ川沿いの歩道並木の一本一本
に、アルファベットの札がかけられま
した。私はSEGAWAですから、S
の木の所で待つわけです。ただし、S
からはじまる名前は多いので、Sの木
は本数を増やしてありました。

出場希望者は、前年の九月迄に申し
込みをすると、協会から許可書が送ら
れてくる仕組みですが、希望者が多数
な為、毎年抽選になるそうです。

ある日、夫が、突然この許可書なる
ものを持ち帰ったのです。

全長四二・一九五キロという距離を
走るのはきらいではないにしろ、普段
から、練習を積んでいるわけでもない
人が、どうやって走るというのでしょ
う。地図帳でみると、東京駅から直線
を引いて八王子辺りになる距離です。
毎週のように幾日も出張に出かけ、会
社の帰りも十時以降の人が、申し込み
をしてから半年の間に、どれだけのこ
とをするつもりなのでしょう。

ところが、一向に夫は決意を取り下
げることもなく、出張先で夜に走った
り、休日に練習をしたり、会社の帰り
に走ったりと、本人なりにできる努力
はしたようでした。

最終的に、継続して走れる距離は二
十キロがせいぜいという所でした。

とうとう、その日はやってきました。
一流選手団はスタートと同時に、す
ごい勢いで飛び出し、短距離走を見る
ようです。

一方、一般の人々のスタート・ライ
ンの様子は、カーニバルの様にリラッ
クスしたものの。思い思いの模様や色の
シャツにトレパン。黄や赤の手袋をは
める人、緑のくじゃくや白いカモメの
帽子を被る人、インディアンの服装、
バットマン、スーパーマン、カメラの
ダンボールから顔や手を出している人
、バレリーナ、ぬいぐるみのライオン
から目だけ出ている人、と仮装行列に
参加したような人々もいます。出場者
全員の表情が、この日を持ちこがれて
いたように生き生きしていて、春の訪
れを祝う祭典を見るように楽しげでし
た。

夫が前日購入してきたロンドン・マ
ラソンの特集本によれば、一般の参加
者はおおよそ二時半ごろまでに走り終
えるとありました。朝の様子では、夫
は迎えにきてほしそだったのです。あ
まり気がすすまなかつたのですが、大
会を見学がてら、子供達と出かけるこ
とにしました。

二時過ぎ、会場付近の地下鉄駅は、走り終えた選手やその家族でごったがえしていました。

汗と、日焼けと、完走者に贈られる金色メダルを首にかけた選手を見て「いいなあ」と子供達はうらやましがることしきり、次々に出会う金色メダルの選手は、なんだか偉い階級の人達のように輝いてみえます。

さて、三時半を過ぎても、四時をまわっても、夫の姿はさっぱり見えません。

変わりやすいイギリスの天候は、ポカポカ陽気から、じっと立っているだけで冷たさが登ってくるように急激に寒くなってきました。

周りは、完走した人々の家族が喜びで抱きあったり、記念写真をとったり肩をたたいてほめあったり、握手をしたり、ホットドッグやアイスクリームをおいしそうに食べたり。うれしそうな、みんなの胸には、メダルがピカピカ光っています。

三人の子供達は、ため息をついて、うらやましそうに眺めているだけで、寒さがよけい身に浸みってくるようでした。

四時半を過ぎても、まだ夫の姿はありません。いくらなんでも遅すぎると病院にかつぎこまれた人のリストに番号がないか、ゴール地点に姿が見えないか、子供を走らせたり、一応家にも電話をしてみたり。タンカーで運ばれている選手もいるという子供たちの目撃のことばも他人事ではありません。

あまり寒いので、近くのコーヒーションに交代で入り、温かい飲み物でなんとか体を温めながら時間をつないで終了時刻の五時まで待ちました。

係員も帰り出し、にわか雨も降ってきて、もう、これ以上どうすることもできないみじめな気持で、雨にぬれながら帰ることにしました。

電車の中でも、それにしても、どうなってしまったのかと心配です。今ごろ、病院から家に電話が鳴り通しじゃ

ないのかしら一と。だから、こんなこと最初から止めればよかったのに、意気がって無理するから一などと、心配を通り越してグチが出かかります。

ぼんやりと玄関に立つと、寒さのぎに選手達に配られていたやわらかいアルミホイル状の大きな紙が放つてあります。

「パパだ！」

と叫んで、子供達は、裏のガレージから鍵がなくて家の中に入れない夫を捜し出してきました。すぐに、目に入ったのは、夫の胸にキラリと光ったメダルだったので。



紹介 『統合ヨーロッパの民族問題』

著書の言葉…「あとがき」より

東欧の民族問題についてなにか書けないか、というお話を、イスラム研究の分野で近年著しい活躍をしている鈴木薫さんと講談社の丸本忠之さんからいただいたのは、二年以上前の一九九二年六月から七月にかけてのことである。

「二十一世紀は民族の時代ですから問題はこれからです」といつつ、能力不足の猶予をいただきながら、あつという間に二年がすぎてしまった。

この二年間で民族に関する大量の書物が出された。しかしそれでも、本書に他のものとは異なるなんらかの意義があるとするれば、「統合ヨーロッパの民族問題」というかたちで、現在急速に進展・拡大しつつあるヨーロッパの統合の問題と、歴史的な「近代ヨーロッパ世界システム」の問題と結びつけ

て、民族問題を論じようとしているところにある。

ソ連・東欧の社会主義体制は、富と豊かさを拡大する経済システムとしても、高度情報化社会に対応する開かれた社会・政治システムとしても現代を生きのびられなかった。しかしだからといって、近代「ヨーロッパ型」の世界システムは、すべてに人に富と豊かさや幸せを保証するシステムになりうるのだろうか。ではなぜ「ヨーロッパ」の東半分は、歴史的にこのシステムの導入に失敗し、民族問題を生み出してきたのだろうか。これが私の基本的な出发点であった。

実際、豊かさと発展と民主主義を期待して遂行された一九八九年の東欧の体制転換の後、「市場化」と「民主化」、豊かさと発展の展望の困難さの結果、東欧のみならずロシア・統合ヨーロッパの内外で、再び民主主義の回帰があらわれている。

いま、二一世紀にむけての民族問題は、社会主義体制の崩壊後、それ以外

に選択肢がなくなった資本主義社会システムを効果的に実行することができない地域での、「ヨーロッパ型社会システム」にたいする意義申し立てとして現われているといえないだろうか。

そうした中で、民主主義の台頭、民族紛争の泥沼化にたいして、本書では、地域における共存と共生たる歴史的な地域統合の試みに、解決の糸口を見いだそうとしている。また、現代のヨーロッパ統合とその拡大の過程で現れつつある民族問題・民族主義については、国民国家を越えての重層的な地域協力に焦点を当てることによって、小国と民衆の側からの、独自の地道な突破口を見いだそうと試みている。

その意味で、本書はつたないながらも、民族問題の発生の歴史的・現代的な根元と、民族問題の解決のための共存と共生の展望とに、迫ろうとする試みである。



△「民族の可能性」Vより抜粋

「自分がなに民族なのか」という、一見自明にみえるような問いも、実は明白ではない。「民族」の統計上の数の誤差は、東欧では歴史的に常に存在してきた。その誤差は、通常数万から時として数十万人におよぶ。

永井清彦氏は、「国境をこえるドイツ」で、ポーランドでは一九八八年の公式統計で、ドイツ人はわずかに二五〇〇人であったが、一九八九年の東欧の「革命」後、かたくみて三五万人、一説では一〇〇万人が「自分はドイツ人」となのりだした、と述べている。これは象徴的な例であるといえよう。

通常、一つの地域がある国家から別の国家に「行政的に」移動するだけでその数字は大きく変動する。たとえばトランシルヴァニアの民族別人口統計では、ハンガリー統治下の時代とルーマニア統治下の時代では、ハンガリー人、ルーマニア人の数がそれぞれ三十万人前後動いている。

このことは、これだけ民族紛争をくり返しながらも（あるいは、それだからこそ）、「自分はなに民族であるか」を確定しえない人々が、かなりの数に上ることをも意味する。

一つは選択肢の問題である。歴史的に、東欧の民族は、基本的に言語、宗教によって分類されてきた。自分はなに民族と考えるか、という民族意識（アイデンティティ）の項目は、第一次世界大戦後に導入されたものなのである。

言語についても、自分の母親は何語かではなく、自分にとっての第一義的言語はなにかと問われるとき、少数民族については、自分のマイナーな母語ではなく、支配言語（歴史的にはドイツ語、ロシア語、ハンガリー語、独立後は「国民国家」を形成する主要民族の言語）を第一言語とすることは多いのである。

第二は、混血の問題である。たとえばセルビア人とクロチア人の混血の場合、民族的には、セルビア人、クロチ

ア人、ユーゴスラヴィア人、さらに一九七〇年代以降はムスリム人という選択が可能であり、また宗教的にも、正教、カトリック、イスラム、あるいは無宗教いずれの選択も可能となる。

第三に、支配民族側に登録することが容易にするさまざまなプレッシャーが存在する。場合によっては、純粋のスロヴァキア人、ルーマニア人であっても、ハンガリー統治下では、ハンガリー人を選択した方が生活に支障がなく出世の機会が開ける（支配民族が逆になれば選択する民族は逆転する）とする考え方は奨励もされたし、しばしば現在に至るまで行われているのである。

第四は、ユダヤ人の改宗と積極的同化である。「ユダヤ人」が民族かどうかも本来的には問題となるべきであろうが、ユダヤ教を信奉してはつきりとユダヤを表明している層にたいし、特に知識人層にはカトリックなど現地の宗教に改宗して同化政策を受け入れ、積極的にその国の「民族」になろうと

するものが多かった。

彼らは、外部からは、たとえ改宗してドイツ系（ハンガリー系）の名称と習慣を保持しようとするが、それゆえにユダヤ人とみなされるが、それゆえにこそ近代においては強力な「民族」を前面に押し出していった。たとえば、ハンガリー独特の音楽を採集し広めた、バルトーク、コダーイ、ハンガリーの「民族」詩人アディ・エンドレ、ハンガリー民主主義革命を担って民族政策を展開した急進党首ヤーシなどがその例である。ミツキエヴィッチなどの愛国のポーランド人も改宗ユダヤ人であった。

こうしてみると、東欧の民族は基本的には中央集権的同化政策に対抗するため、「作られた」民族語を基礎とし、宗教、文化、地域の独自の伝統に立脚して成長した同族集団であるといえるが、それに加えて、「他者と自己を区別する自意識」とも密接に結びついて、社会と生活に関与しているものであるといえる（姜信子「ごく普通の

の在日韓国人」は、東欧に日常的な民族意識を理解する上でも役立つ）。

しかし、東欧の諸民族が重層性・可変性を持ち、他者との区別化と自己主張を不断に行ないながらも、他方で彼らは歴史的に長期にわたり、平時には多民族・多分化の中で共存・共生してきたことも事実である。



紹介 『体制轉換の経済学』

著書の言葉…「はじめに」より

別経済主体の競争にもとずく市場経済へと轉換を試みるようになった。

二十世紀には二つの世界大戦がありそれぞれの戦争を契機に新しい社会システムが出来上がってきた。いうまでもなく、社会主義は第一次世界大戦を契機にロシアで初めて社会システムとして構築され、第二次世界大戦後にヨーロッパとアジアに広がった。その意味で、二十世紀は世界大戦と社会主義の時代であったともいえる。もちろん他方に極には資本主義社会があり、二十世紀の世界は2つの世界大戦を挟んだ社会主義の現実化と、それになりたい資本主義世界の競争と闘いの世紀であった。

一九八九年のベルリン壁崩壊、一九九一年のソ連邦解体によって、いわゆるヨーロッパの社会主義国はそれまでの原理を捨て、非社会主義国として再出発することになった。統治システムとしては共産党による独裁政治から複数政党制による議会政治へ、経済システムとしては計画指令システムから個

その社会主義システムが、二十世紀も終わらんとするときに、戦争という非常時を経過することなく、平和的に瓦解、崩壊した。かの強大な帝国であったソビエト社会主義連邦もあっけなく自壊したのである。いったいこれらの諸国に何がおこったのだろうか。一つの歴史社会がいつも簡単に崩壊する

のだろうか、それも一時に。

筆者は一九八八年から一九九〇年にかけて、在ハンガリー日本大使館の専門調査員としてブダペストに駐在していた。着任当初からすでに始まっていた共産党内部の亀裂を追いかけ、全面市場経済化へのステップを観察してきた。事態は予想した以上のスピードで進行し、一九八九年秋にはハンガリーの共産党（社会主義労働者党）が平和的に解散し、その直後にベルリンの壁が崩壊し、ルーマニアではチャウシェスク大統領の失脚・射殺というショック的なクーデターが発生した。この一連の歴史的展開の中で綴った論文を『ハンガリー改革史』（日本評論社、一九九〇年）として上梓したが、そこでは主として、歴史的な叙述に力点を置き、そこから二十世紀社会主義システムの固有の特徴と性格を明らかにして、自壊への論理を示した。

その後、中・東欧諸国では市場経済制度の構築と経済主体育成のための壮

大な社会的実験が始まった。システムを破壊するのは易しいが、新たなシステムを構築するのはその何十倍何百倍

もの時間と労力を必要とする。その仕事が始まっている。その作業は、今では、西は旧東ドイツから東は旧カザフスタンにいたるまで、ヨーロッパとアジアを横断する地球規模の実験として開始されている。著者はこの時期に民間のシンクタンクに移り、このプロセスを目の当たりにすることになった。

日本政府も、G7あるいはG24の枠組みの中で、これらの諸国への知的・技術的援助をおこなっており、民間企業の中には将来のビジネスへ向けて、独自の支援を提供しているところもある。そしてこの壮大な新システム構築の作業は二十一世紀の世界へ向かって続けられる。今の時代を生きるわれわれは、この歴史的な大実験がもつ意味に無関心ではありえない。

いったい二十世紀社会主義とは何であったのか、人類社会はこの二十世紀

社会主義の存在から何を学ぶことができるのだろうか、ひとつの社会が崩壊するその必然性はどこにあったのだろうか、そしてその必然性は人類社会の発展に何を教訓として残しているのだろうか。

新しい社会への転換はどのようなプロセスを通じておこなわれるのだろうか、そのプロセスにはどのような問題が存在しているのだろうか、はたしてこれらの諸国は市場経済国として自立していけるのだろうか、国により地域によってどのような違いがあるのだろうか、そしてこれらの諸国の体制転換が完成をみた段階で、世界はどのような様相をみせるのだろうか。

まさにこれらの課題に応えることこそ二十世紀社会の総決算であり、新たな世紀への出発なのである。過去の歴史に学び、未来への発展に生かす事が同時代に生きる我々の使命でもある。本書はこのような想いを込めて若き読者に贈る筆者のメッセージである。

第八章「歴史の始まり」より抜粋

二十世紀の終わりになって、近現代のヨーロッパが歩んできた帝国と戦争の時代の終りを告げるもの、それがソ連の崩壊と、「東欧革命」の歴史的メッセージである。それはヨーロッパにとって、従って人類にとっても、一つの大きな歴史時代の終焉を意味する。まさに、ヨーロッパとロシアが帝国時代から決別した歴史的瞬間であり、少なくともヨーロッパに関する限り、帝国の時代は終焉した。ハプスブルグ帝国、第三帝国、そしてロシア帝国と続いた歴史に終止符が打たれ、大きな歴史時代が幕を閉じた。十五世紀から始まったヨーロッパの帝国の時代が、ロシア帝国という最後の帝国の崩壊によって、終わったのである。われわれはこの意味で、この意味においてのみ「歴史の終わり」を語ることができる。

今、帝国の支配から解放された諸国は、自らが拠って立つ社会的経済的基盤の構築に取り組んでいる。支配の

空白はまた、民族間の紛争を誘発している。帝国本体においても、旧来の制度の解体は、誰にも支配・管理されない「真空」領域を生みだし、戦後直後に似たカオスを生み出している。これらの諸国の内部および諸国間の秩序形成には、10年単位の時間が必要なことは明らかである。

ソ連社会主義がロシア帝国であったことは、事後的にも証明された。すなわち、国際社会はロシア連邦共和国がソ連の国際的な権益を継承する事を、何の異議を唱えることなしに承認したのである。国連安全保障理事会における常任理事国としてのポストは、ロシアが継承したし、START（戦略兵器削減条約）の交渉相手もロシアであった。これは後に軌道が修正され、ウクライナとの交渉も進められることになったが、明らかにそれは事後的な承認を迫るものであった。ロシアもまたこうした国際社会の暗黙の承認を前提に、旧ソ連の海外資産をロシアの管理に置き、国際社会もまた、旧ソ連の債

務取立交渉をロシアに絞っている。

こうしてみると、世界の政治は依然として大国を中心として動いていることがわかる。あからさまな大国主義の行動は影を潜めたが、帝国時代の大国中心の政治は生きている。ロシアはNATOに対して軍事大国としてふさわしい地位を求めているし、旧ソ連の諸国にたいする軍事的影響力のありうべき行使にたいして、暗黙の承認を迫っている。資源のない旧ソ連の諸国は再びロシアの庇護を受けざるをえない状況に陥っており、旧帝国復活はありえないものの、文明的な国際関係の構築には多くの紆余曲折が予想される。

帝国の時代は終わったが、しかし新しい時代の秩序は形成されていない。すでにEU加盟を照準としているハンガリー、チェコ、スロバキア、ポーランドは別として、旧ソ連の共和国の自立の道は次の道である。資源への渴望とロシアの帝國的紐帯の復活を望む勢力との引力が、これらの諸国の自立を遠い道程にすることは確実である。

集 秋の夜長の

この1冊

特

遠藤周作「深い河」

吉田 之憲

以前読んだこの本が印象に残っています。どうしてこの本は人の胸を打つのか——人様々でしょうが、私にとっては、日常のストレスの中で、一服の清涼剤でした。

当地に来て早や二年十か月、この間日本の会社の特徴の一つである「結果を急」がされる為に、会社が設立されるや否や、フルスピードで走らされ、要求された業績を残すという使命感に駆られると、悲しいかな、現地人の意識、自覚（とくに中間管理職者）の欠如、非効率性、或は口ほどには実力は伴わずプライドだけは高いという国民性（？）などに悩み、ついつい相手を

怒鳴ってしまったのは後悔するという生活から、まだ抜けきっておりません。

しかし乍ら、妻に先立たれたこの本の主人公の一人（幾辺）の心境、「一人ぼっちになった今、幾辺は生活と人生が根本的に違ふ事がやと判つて来た。そして自分には生活のために交わつた他人は多かつたが、人生の中で本当にふれあつた人間はたった二人、母親と妻しかいなかったことを認めざるをえなかつた。」を読むと、全く他人事ではなく、果たして自分の毎日はこれで良いのかと、深く反省させられます。

そして、「少しでも早く『別の生き死にに拘る事に比ぶれば、他の事は何程の事でもない』という心境に到達して（本当にその心境に達させるかの可否かは別としても）、何も焦る事は無い、それよりもっと、ハンガリー人との真の意味での心の触れ合いを求めようように努めねば」という気持ちの切り換えが、一寸でも出来たのではないかという気がしています。

「神の拳」（フレデリック・フォーサイス著）を読んで

西田 篤史

フレデリック・フォーサイスの卓越したストーリーメーカーとしての冴えを、またまたこの最新作「神の拳」で見せつけられてしまった。「ジャッカルの日」以来、彼の作品は常に国際政治の舞台裏で本当にこんな事が起こっているのではと思わせるストーリーの現実性と、世界中を飛び回って行われる徹底した取材が作り出す臨場感で、どンドン読む者をフォーサイスの世界に引き込んで行く。冷戦の終結により従来この種のスパイものにありがちな米国CIA対ソ連KGBという構図は前時代的なものとなり、なかなか題材がとりにくいと思つたしまうが、フォーサイスの求める題材はどんな国際情勢にあつても、現実味を失わない。彼の筆にかかると、ヨーロッパの小さな街の裏通りも国際政治の趨勢を決める大舞台となるし、飛行機で隣り合わせた老人もテロリストの指導者となつて

しまう。

この最新作「神の拳」の題材は、4年前に世界中を震撼させ、まだ記憶に新しい湾岸戦争であり、舞台の中心はクエートとイラクである。いろいろな人物が登場するが、今から購読される方もおられると思うので、ストーリーについてはこれ以上触れる事は控えた。今この原稿を書いている10月中旬またぞろサダムが動きだし、クエートとの国境で緊張が高まっているが、このニュースを聞いて思わずこの「神の拳」がまだ続いており、主人公がまた活躍するような錯覚をおぼえてしまった。

普段ニュースでしか見られない国際政治において、影の部分で暗躍する架空の人物と実在する人物を登場させ、毎度の事だが最後には誰が架空で誰が実在か判らなくなる。この「神の拳」でもイラクのフセイン大統領、サッチャー英前首相、ブッシュ米前大統領が登場する。この辺りは誰でも知っている実在の人物だが、米空軍の隊長、英

国謀報機関の中東課長、になってくると架空か実在かわからなくなってきた、最後には主人公でさえ実在ではないかと思えてくる。

さてフォーサイスの作品で主人公となるのは、殆どの場合、西側の謀報機関に属する報謀員、つまりスパイである。彼の作品から毎回滲み出てくるのは、「私は小説家になってしまったが実はスパイになりたかった。」と思わせるほど、フォーサイス自身がスパイという仕事に強烈な憧れを持っているのだと思える。ただ、所謂かっこいい面だけでなく、むしろ人並みの幸福さえなく、仕事と家庭との間で苦勞する人間的なスパイを、時には描いたりする。この「神の拳」に登場する主人公も自分の生い立ちを引きずりながら、敢えて困難な状況に飛び込んで行く。この主人公になりきってしまえば、皆さんもすぐに湾岸戦争の舞台裏に立ち、世界の運命を決定することになる。この本のタイトルである「神の拳」とは一体何なのか、サダムフセイン

は、はたして卓越したアラブの指導者か、はたまた只の気違いか。湾岸戦争は一体何を残したのか。今まさにテレビのCNNニュースは緊張が高まるクエートの街の様子を伝えている。「神の拳」はついにフォーサイスのてを離れ、現実の世界で動き出したのかも知れない。



ハプスブルグ家について

岡田 茂

ハンガリー・ブダペストに駐在に來て以降、やはり関心を持ったのはこのハプスブルグに就いてであった。ハンガリーはこのハプスブルグ帝国の統治下に、1686年、それまで150年に亘って占領を続けていたオスマントルコを駆逐して以来、1867年に成立したオーストリア・ハンガリー二重帝国時代を経て、1918年ハプスブルグ家のいわゆる最後の皇帝と称されるフランツ・ヨーゼフ皇帝治世下の19世紀後半に、当時のヨーロッパでも

最も進んだ国家と歌われていた事も、ハプスブルグについて関心を呼んだ遠因でもあった。その時代に、ヨーロッパ大陸部で一番最初に地下鉄を走らせたのが、このハンガリー・ブダペストであった事は周知の事であるが、当時ブダペストは、ロンドン・パリを凌ぐヨーロッパの中心都市であった。ハプスブルグの三都物語では無いが、ウィーン、ブダペスト、プラハという華麗な都の一角であり、1100年の歴史を持つこのブダペストに駐在することで、更に一層このハプスブルグ家の歴史に触れてみたいと思った事も事実である。

そのような背景の中で、読んだのが非常に読みやすく、内容も平易であったのが、同じ著者からなる、講談社現代新書『ハプスブルグ家』並びに『ハプスブルグ家の女たち』更には、大宅荘一ノン・フィクション賞を取った塚本哲也著『エリザベート、ハプスブルグ家最後の皇女』であった。

ハプスブルグ家は、700年に亘り

中欧に君臨した名門だが、16世紀のカール5世の時代には、スペインから新大陸メキシコ・ペルーに至るまでの版図を有し、日の没する所がないと皇帝自ら豪語するほど繁栄を誇り、マリア・テレジア女帝時代はヨーロッパの強国にまで発展したが19世紀に入ると帝国内の多民族自決主義が高騰して、帝国の矛盾が噴き出し、然しもの帝国も瓦解の危機に瀕するが、それでも、弱冠18才で即位し、68年もその帝位にあり名君との誉れ高かったフランツ・ヨーゼフ皇帝の功により、帝国の維持を保っていたものであった。しかしながら、その皇帝も老境が近づくに連れて帝国にも悲劇が見舞うようになり、それがマイヤーリングでのわが子、皇太子ルドルフの、愛人との自殺であり、またそれから約10年後の最愛の妃エリザベートのスイス・レマン湖畔でのイタリアのアナキストによる暗殺であった。それ以後、帝国は崩壊への道を駆け進むのであった。

塚本哲也著の『エリザベート』はこ

の皇妃エリザベートを表題としたものではないが、この著作にも皇妃の事は多く割かれている。皇妃エリザベートはバイエルンの王女で希に見る美貌の女性として世に名高いが、ハンガリーをこよなく愛し、マジヤール語も話した由で、依って、ドナウ川に架かる6本の橋の一つにその名を残し、その橋の、ゲレルトの丘側の袂に、皇妃の座像を造ったブダペスト市民の心意気が聞こえてくるようである。

さて、時が変わって、丁度5年前の1989年11月9日、ベルリンの壁が壊されて、東欧諸国が拳って、社会主義と訣別し、約半世紀に亘って東西を分断していた鉄のカーテンが消滅したが、このベルリンの壁崩壊への端緒となったことは、これも既に、余りにも有名な、当時まだ社会主義であったハンガリーが、西への窓口であった隣国オーストリアとの国境を、盟主であった当時のソ連にも無断で同年9月11日オープンしたと言うことであった。この国境がオープンされるかも知れない

と言う噂を当時聞き付けた旧東独市民がハンガリーに大量流れ込んで、これらの旧東独市民を旨くオーストリアに逃がす目的で目論まれたのが、ヨーロッパ・ピクニック計画というものであった。

このヨーロッパ・ピクニック計画なるものを思い付いた人物の一人こそがハプスブルグ家の現在の当主で欧州議会にも議席を持つオットー・ハプスブルグその人であり、東西の国境に東西両市民が集まって、東西の融和、さらには将来のヨーロッパ再統一については話し合おうと言う名目で計画したもので、鉄のカーテンが最も薄いと言われているハンガリーのショブロンでピクニックを行うと言う計画であったが、その計画が奏功して、旧東独市民がオーストリア經由旧西独に入ることができ、それが引き金となってベルリンの壁崩壊から社会主義の終焉へと繋がって行ったものである。この話はNHK報道特集「ヨーロッパ・ピクニック計

画―こうしてベルリンの壁は崩壊した―」を見て知ったものであったが、この番組に大変感動を覚えたのを、今でも良く記憶している。

当時、オットー・ハプスブルグの脳裏にあったのは、かつての帝国時代に東も西も、右も左も無く、自由に行き来でき、多くの民族が融和されていた父祖の時代に思いを馳せていたことではなかったかと思量している。現在、オットー・ハプスブルグは82才と聞いている。

なお、最近、同じ塚本哲也序文、南川三治郎写真に拠る新刊「皇妃エリザベート―その名はシシイ」が河出書房新社から出た様で、既に先行帰国している家族が買い求めてくれてるのでそれを見るのを今から楽しみにしている。

この夏、引越し荷物の整理の為、僅か1週間程ハンガリーに来てくれた先行帰国している妻と共に、マイヤーリングさらにバーデンを訪ねてみたが、

このようにハプスブルグ家ゆかりの地を訪ねる事は、ハンガリーに駐在する身としては大変興味深いものがある。

「最近、読み直した本」

下川 義隆

今回、ドナウ通信の記事を依頼されふと最近本を読まなくなった事に気がきました。ハンガリーに来て、新刊本が手に入りくいのも理由ですが、毎日々、会社の書類にいろんな活字を読まされ、家では子供にじまをされ、落ち着いて、本を読める時間のないのもひとつの理由です。

前置きが長くなりましたが、先日長期の出張があり飛行機の中、ホテルと時間を見つけ、暇つぶしに読んだ本を紹介します。

但し「最近読んだ本」と言うよりは「最近読み直した本」です。この所、世の中では「環境、人口増加」等が何かと話題になっていますが、10何年前にこの本を読んだとき、物理学の観点

から、今後地球に住む人間がどのように生きていかねばいけないか、過去の歴史もこの法則によって、栄枯盛衰、歴史が作られて来たことが述べられています。改めて読み返してみても、その先見の命に驚くばかりです。

『エントロピーの法則』これがこの本の名前です。著書はジェレミー・リフキン、翻訳者は竹内均教授です。一瞬強い物理の本の様ですが、事実10何年前の当時科学雑誌（ニュートン、クオーク等々）に凝っていた私は物理の本として購入したのものでした。

実際の内容はと言いますと、物理に始まり、宗教問題、過去の歴史、これから人間が対処すべき問題について物理の法則を使い、易しく解説された本です。ところで、『エントロピーの法則』とは何のことだかご存じですか。別名『熱力学の第二法則』、第一法則は、有名なエネルギー保存の法則ですが、この法則の裏返しにあるのがこの法則で、『使われたエネルギーはもと

の形には戻らず、どんどん不要なエネルギーへ変換される』この法則は、真理中の真理として物理では有名な法則です。過去真理と言われたものが、新しい発見者により、覆されていく中、例えば、「万有引力の法則は、相対性理論に」、エネルギー保存の法則は、核分裂で質量はエネルギーに変換され、「この『エントロピーの法則』だけは未だに真理とされています。

またこの本の訳者竹内均教授のまえがきとして東洋的思想を取り上げ、「覆水盆に帰らず」とか、仏教の考え方の実践、或いは徳川300年の歴史から限りある資源、エネルギーの有効利用を過去の日本は実践していたことが述べられています。

私にとって『エントロピーの法則』とは、高校時代の熱力学の授業を思い出します。発電所用のボイラー、ガスタービン等その中でいかに熱効率を上げ、有効にエネルギーを利用するかそして最後に廃熱としてのエントロピー

の発生となります。

当時は良く理解できずただ無駄なエネルギー位にしか思っています。ですが、この本によってこの法則の理解と、また物理の法則と一般社会とを結び付ける考え方に共鳴したものです。

以前、香港にいた当時ある中国人と「中国の発展について」議論をしたことがあります。

その中国人は、中国の発展の為に「エネルギー開発を急ぎ日本並みの状況に近付けなければいけない」と力説していました。ところが別の人物が、「現在の日本人一人当たりの石油消費量は、中国の10倍、人口は10倍、単純計算しても中国が日本並みになるには100倍の石油がいることになる」。そのような石油が果たしてこの小さい地球上に存在するのか、存在したとしても、何年分なのか。このままの状況でも「石油の埋蔵量は30年分しかないのに」、結局この時の議論は、このままでは中国の発展は望めない。限り

ある資源を有効に使いつつ、中国の場合人口を減らす以外に根本的解決策はないと言ふ結論に達したのでした。

普段何気なくゴミを捨て、部屋の電氣をつけっ放しにしていたり日常の生活の中でも小さなエネルギーの無駄遣いはしていないか、つい考えさせられてしまう本です。

最後にもう一回「使われたエネルギーは元の形には戻らず、ほとんど不要なエネルギーへ変換される」。皆さんも「エントロピー、エントロピー」と唱えながらどの様なエネルギーの無駄使いをしているか考えてみませんか。

日本から届いた本

丸山 和正

「シドニー・シェルダン」

娯楽感覚で気軽に読み楽しめる本として、今アメリカで一番人気があり、日本でもその翻訳作品がベスト・セラールになっていく、シドニー・シェルダン・シリーズをお薦めしたい。

最近日本の友人から小包が届き、中

を開けたら、シドニー・シェルダンの作品がどっさり詰まっています。

「真夜中は別の顔」、「明け方の夢」

「明日があるなら」、「時間の砂」

「血族」、「私は別人」

いずれも上下2巻ずつです。

噂には聞いていたが、手をつけず、本棚にしまっていたのが、たまたま出張時、飛行機の中で時間つぶしにと思つて取り敢えず「真夜中は別の顔」上下を持って出たのがきっかけで、一気に時間のたつのも忘れ読切りました。

残りもむさぼるように読みましたが

中でも特に面白かったのが「真夜中は……」と「明け方の夢」です。この二つ

は前編後編の関係にあり「真夜中は……」

は単独だけ切り離してもそれなりに

一つの作品として成り立っています

「明け方の夢」はまず「真夜中は……」

を読んでいないと楽しみが半減します。

「真夜中は……」はラリー・ダグラス

(自由奔放なプレイボーイ)と彼にかかわる二人の女性ノエル・ページとキ

ャサリン・アレクサンダーが中心とな

り、恋ありスリルあり、又、舞台もアメリカ、フランス、ギリシャ……とめまぐるしく移り、殺人(?)そして、裁判と大詰めに至る。

後半からギリシャの政財界の大物コンスタンティン・デミリスが登場、天才的刑事弁護士ナポレオン・コタスと共に、一気に物語を盛りあげて行くだりは、コーヒーを飲む事さえ忘れさせるタッチです。

裁判——判決、そして最後の数ページに隠されたどんでん返し!!誠にあざやかと感心させられます。

「明け方の夢」は前述のギリシャ大富豪コンスタンティン・デミリスが中心となり、新たな宿敵スパイロス・ラデプロー、そして、辣腕弁護士ナポレオンが微妙にからみ、これ又物語の下りは裁判に発展してゆく。有罪無罪の必死の攻防、駆け引き、判決に至った後、またもや思わぬ結末が……。

まあ、だまされたと思つて読んでみることで。これでも貴方をストーリーの中へ引き摺り込むこと請負です。



人物往来



(敬省略)

△大使館関係▽

離任

3月 江浦氏、夫人

中山氏、夫人

5月 渋谷氏、夫人

7月 久保氏、夫人

阿部氏

10月 本田公使、夫人

長岡さん

着任

3月 加藤氏、夫人

川崎氏、夫人

5月 渡辺氏、夫人

6月 世安氏、夫人

副島公使

10月 中西氏

△商工会関係▽

離任

3月 清川氏、夫人 (大和証券)

天野氏、夫人 (トーマン)

重枝氏、夫人 (キャノン)

4月 荻原氏、夫人 (丸紅)

江原氏、夫人 (日商岩井)

5月 村岡氏、夫人 (三菱商事)

小林氏、夫人 (トーマン)

6月 成沢夫人 (伊藤忠)

藤島氏、夫人 (丸紅)

鈴木氏、夫人 (三菱商事)

垣添氏 (大倉商事)

8月 武井氏、夫人 (野村証券)

中西夫人 (さくら銀行)

宮治氏 (住友商事)

岡田夫人 (住友商事)

石崎夫人 (協和醗酵)

10月 榎原氏、夫人 (キャノン)

中西氏 (さくら銀行)

3月 着任 藤沢氏 (大和証券)

丹下氏 (トーマン)

丸山夫人 (伊藤忠)

浅沼夫人 (JETRO)

4月 大谷氏、夫人 (丸紅)

伊藤氏、夫人 (竹中工務店)

松山氏 (住友商事)

村野氏 (ソニー)

5月 田口夫人 (JETRO)

小澤氏 (三菱商事)

可児氏 (ホンダ)

馬場氏 (丸紅)

7月 天野氏 (住友商事)

村井氏 (大金)

丹下夫人 (トーマン)

8月 大河氏 (プリジストン)

藤沢夫人 (大和証券)

可児夫人 (ホンダ)

松山夫人 (住友商事)

10月 村野夫人 (ソニー)

丸中氏 (さくら銀行)

小澤夫人 (三菱商事)

島寄氏 (三井物産)

掲示板

展覧会のご案内!

貸フラット

貸フラット

2区80㎡3部屋。台所、風呂、チャタルカ通りから、奥に入ったアパート。ガレージ、電話付き。

月額8・9万Ft。

問い合わせは編集部。

貸フラット

バルトーク・ペーラ通り。但し、フラットは大通りにではなく、中庭に面しており、騒音はない。

120㎡4部屋2浴室。天井は

3・4mの高さ。現在、改装中で

11月始めより2・3年間使用可。

電話付き。野外の駐車スペースの

権利あり。月額12万Ft。

問い合わせは編集部。

ハンガリー政府奨学金留学生の井口壽乃さん(MTAハンガリー美術史研究所所属)がこの度ブダペスト市内のギャラリーで個展を開催されます。

作品は「時間」をコンセプトしたカラーエッチングによるアートワーク。1982年より展覧会活動を開始、東京、静岡をはじめドイツ、カナダ、韓国においても発表経験をもつ彼女ですが、ブダペストでは初公開とのこと。

オープニングでは映像作品のプレゼンテーション及び、ゲームシチュ・ペーテル氏(映像作家)のレクチャーが企画されています。皆様お誘い合わせの上お越し下さい。

*入場無料

◎会期：11月2日～21日

◎会場：A Fata! Mavszek Klubja

(ヤング・アーティスト・クラブ)

◎オープニング・パーティー

11月2日(水) 19:00

貸フラット

2区トロクヴェース通り。1階にスーバー、花屋があるところ。45㎡3階。居間と寝室。

月額3・5万Ft。

問い合わせは、直接以下のところへ。

TEL 06 160 1347 1451

(AM 8:00 ~ PM 10:00)

英語あるいはハンガリー語で、リースローあるいはマリア。

譲って下さい

安く炊飯器を譲って下さい。編集部までお知らせ下さい。

ドナウ通信編集室

26614967 (盛田)